

# 「龍ヶ崎の撞舞」

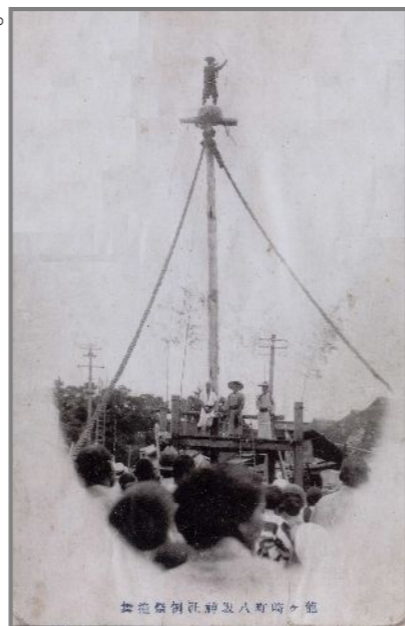
龍ヶ崎の撞舞は、平成11年（1999）12月3日に国選択無形民俗文化財（＝記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財）の採択を受け、平成22年11月18日に茨城県無形民俗文化財の指定を受けました。

毎年7月下旬、龍ヶ崎市上町八坂神社の祇園祭が3日間にわたって行われます。その最終日の夕刻、根町の撞舞通りで撞舞は披露されます。

撞舞は、笛や太鼓の囃子（おごと囃子＝龍ヶ崎市指定無形民俗文化財）に合わせて、緑色の唐草模様の衣裳に雨蛙の面を被った舞男（まいおとこ）が高さ14メートルの撞柱（つくばしら）に登ります。柱の頂上はサンダワラ（棧俵＝米俵の両端に当てる丸い藁で作った蓋）を120枚重ね白い布で覆った円座（えんざ）が作られ、その上に舞男が立ち、四方に向かって弓を引いて矢を放ちます。続いて、逆立ちや仰向けになり、柱に張った3本綱のうち東側に張った綱の上で両手を広げて滑空し、大車輪等の妙技を尽くし、再び綱をよじ登り、柱に戻って柱を下りて舞は終了します。

撞舞は、雨乞いや五穀豊穰（ごこくほうじょう）、または疫病除けの意味があると言われていています。舞男が放った矢を拾った人は、災厄を1年間免れると言われていています。

撞舞の古い資料は、寛政4年（1792）の『天王社祭礼式録帳』の中に「上町半助」という舞男の装束に関する記載があるほか舞男が被った古い面に、「天王町 安政二年（1855）乙卯六月吉日 上辻中下組」と記された2点があります。しかし、これ以前から撞舞は行われていたと考えられ、400年以上前から行われていたとも伝えられていますが、起源については定かではありません。



古い撞舞の絵葉書

（岡澤英夫氏蔵）

## ●撞舞とは

柱や綱の上で、雨蛙の姿をした舞男がさまざまな妙技を行う伝統芸能です。この舞には、雨乞いや五穀豊穰（＝豊作を祈ること）、疫病除け等の願いが込められています。

撞舞は中国から奈良時代に伝わった散楽（軽業・奇術・滑稽物真似に音楽を伴った雑多な芸能）が神前で行われる芸能となり時代とともに地方に伝えられ、庶民生活と密着して変化したものと考えられています。

龍ヶ崎の場合は、水田地帯であり人々の雨乞いや五穀豊穰等の願いが付け加えられ、現在の撞舞になったと考えられています。

また、室町時代から江戸時代初期に流行った蜘蛛舞（くもまい）によく似ていると言われ、17世紀に描かれた『四条河原風俗図巻』（サントリー美術館蔵）や『四条河原遊楽図屏風』（ボストン美術館蔵）、『無款津島神社祭礼図屏風』（大英博物館蔵）等に、高い柱から綱を張った上で、顔の前に赤い布、後ろにはギザギザの布を垂らした獅子姿の舞人が両手を広げて滑空する様子があります。これが龍ヶ崎の撞舞とよく似ていることから江戸時代前期には行われていたと推測できます。

## ●撞柱はどんな物か

高さは14mの柱は、紺と白の木綿布で覆われています。この柱は龍を表し、東側になる紺布は龍の背中、西側の白布は龍の腹を表していると考えられます。

柱の頂上に横木が組まれ、その上に円座が置かれます。その上で舞男が弓を放ち、逆立ち等を行います。円座は直径120cm・高さ85cmほどの大きさで、馬の背を表していると言われ、サンダワラ120個を重ねて作られ白布で覆われています。円座の下の横木には、北側に轡（くつわ＝馬の口にくわえさせ、手綱（たづな）を着けるための金具）、南側に馬の尾と言われる紺染めの麻糸の房が下げられています。

## ●舞男の姿

緑色の唐草模様の衣装（筒袖襦袢（つつそでじゅばん））に裁着袴（たっつけばかま）、雨蛙の面を頭に被り、赤い布を顔の前に垂らし、頭の後ろには色とりどりの紙を張り付けた白い布（＝鱗（うろこ））に見立てた布を垂らします。

この雨蛙は、『雨蛙のフク伝説』と関係があると考えられています。「フクは昔、龍ヶ崎に住んでいて洪水の時には水を飲み込み、日照りの時には水を吐き出して雨を降らせ、農民を助けたという」巨大なカエル伝説です。

撞舞は、龍の背中を蛙が這い上がる様子を表し、雨乞いをするのだとも言われています。

## ●弓を射る動作

舞男は、円座の上に立ち東西南北に弓で矢を放ちます。これは、疫病除け・悪魔除けの意味があります。放たれた矢を手に入れた人は、1年間は災厄を免れ健康と安全が約束されると言われています。かつて民家の屋根が茅葺（かやぶき）だった時代は、この矢が刺さった家は1年間の家内安全と繁栄が約束されると言われました。

## ●撞舞はいつから行われているか

16世紀後半には行われていたと考えられます。現在の八坂神社は上町に鎮座しますが、戦国時代の永禄11年（1568）、龍ヶ崎城主であった土岐胤倫公によって創建された頃は、祇園祭で御仮屋が置かれる根町辺りに御社（おやしる）は在ったと考えられています。そのため、八坂神社が上町に移ってから撞舞は根町で行われていると考えられています。



撞柱と舞台



舞男（谷本仁氏）の衣装



古い資料は、寛政4年（1792）の『天王社祭礼式録帳』に舞男の装束に関する記載がある文書と安政2年（1855）と書かれた古い面です。

安政2年と書かれた面は、この時に新調或いは修復したものか詳細はわかりませんが、昭和44年（1969）に新調されるまで114年間以上使われたことになります。

舞男の装束に関する『天王者祭礼式録帳』は寛政4年であることから、少なくとも210年以上前から撞舞が行われていたことは確かです。

### ●撞舞は龍ヶ崎だけで行われているのか

龍ヶ崎のほか千葉県の野田市・旭市・多古町、秋田県の潟上市（かたがみし）で行われています。

その名称は、野田市が「津久舞」、旭市は「つく舞或いはエンヤーホー（＝陰陽法）」、多古町は「しいかご舞」と呼ばれます。舞や舞人の衣裳、面等に違いはあるものの、高い柱に舞人が登り舞を演じるという形態は、龍ヶ崎の撞舞と似ています。特に野田市は、昭和8年（1933）に津久舞を復活させる際に龍ヶ崎の舞男をはじめ、指導やお手伝いに出向いたことから舞はよく似ています。また、お隣の北相馬郡利根町布川の布川神社でも明治43年（1910）まで「ツクマイ」が行われていた記録があり、安政2年に布川の医師赤松宗旦著した『利根川図志』「ツクマイ図」に蛙の面を被った舞人の姿と舟型を形の舞台が描かれています。

潟上市の蜘蛛舞は、遠方であることから撞舞との関連が薄いよう考えられますが舟上で舞を披露することや「ツクマイ図」に舟型舞台が描かれていることに加え、江戸時代に流行した蜘蛛舞の名称から同類であると考えられます。このほか江戸時代には、現在の千葉県で6か所、東京都で1か所でも行われていたという記録が残っています。



『利根川図志』ツクマイ図

### ●今の舞男は何代目か

現在までの舞男は、7代前までのお名前がわかっています。これに寛政4年の上町半助を加えても8名のお名前しかわかっていません。

撞舞は太平洋戦争で中止され、戦後の昭和25年（1950）復活・再開しました。そのときの舞男が東郷辰五郎さんで、70歳近くまで務めたとされています。戦前の昭和8年（1933）、野田市の津久舞で重次郎（＝舞人）も務めています。

歴代の舞男のお名前は、根町の撞舞通りの歩道にプレートが埋め込まれています。順にご紹介しますと、

- ①東郷辰五郎
- ②瀬ノ尾重男

約20年間舞男を務めました。昭和29年（1954）に再開された野田市の津久舞の重次郎を8回務めています。

その後、交通事故に遭って舞男を引退したため、数年間途絶えました。

### ③三人の舞男

昭和48年（1973）の再度の復活の時には、舞男の役目を正式に龍ヶ崎鳶組合に依頼して、3人が練習しました。そのため3人（小泉勝・飯野幸一・飯島英雄）の舞男が代わる代わる演技をするという特殊な方法をとりました。

### ④北沢 久

昭和49年（1974）から昭和54年（1979）。この方も野田市の重次郎を4回務めています。

### ⑤藍澤正夫

昭和55年（1980）から平成元年（1989）と平成10年（1998）。

### ⑥谷本 仁

平成2年（1990）から現在まで舞男を務めています。

しかし、平成10年は、けがのために先代の藍沢さんが舞男を務めました。

平成20年（2008）からは、後継者の大石さんと2人で舞を披露しています。

### ⑦大石浩司

谷本さん指導のもと5年間の修業を積み、平成20年から舞を披露しています。

